

教育研究業績書

2017年10月20日

所属：薬学科

資格：助教

氏名：藤田 恵

研究分野	研究内容のキーワード
臨床薬学	
学位	最終学歴
博士（薬学）、修士（薬学）、学士（薬学）	京都薬科大学大学院 薬学研究科 臨床薬学専攻 修士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 薬剤師	2005年	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
3 学術論文				
1. TNF- α -857C>T genotype is predictive of clinical response after treatment with definitive 5-fluorouracil/cisplatin-based chemoradiotherapy in Japanese patients with esophageal squamous cell carcinoma (査読付)	共	2013年	Int. J. Med. Sci., 10 : 1755-1760 (2013)	Omatsu H, Kuwahara A, Yamamori M, <u>Fujita M</u> , Okuno T, Miki I, Tamura T, Nishiguchi K, Okamura N, Nakamura T, Azuma T, Hirano T, Ozawa K, Hirai M 食道がん患者における遺伝子多型と抗がん剤の臨床効果の関係について明らかにした。(遺伝子多型の検出を担当)
2. Treatment schedule-dependent effect of 5-fluorouracil and platinum derivatives in colorectal cancer cells (査読付)	共	2012年	Eur. J. Pharm. Sci., 45: 272-281 (2012)	Takara K, <u>Fujita M</u> , Minegaki T, Yamamoto K, Takahashi M, Yokoyama T, Okumura K 大腸がん細胞において、5-FUとcisplatinの併用効果が、処置スケジュールにより異なることを明らかにした。 (実験、解析、ならびに論文作成の一部を担当)
3. Involvement of the mevalonate pathway in the antiproliferative effect of zoledronate on ACHN renal cell carcinoma cells (査読付)	共	2012年	Oncol. Rep., 7: 1371-1376 (2012)	<u>Fujita M</u> , Tohi M, Sawada K, Yamamoto Y, Nakamura T, Yagami T, Yamamori M, Okamura N Zoledronateの腎臓がん細胞における抗腫瘍効果に、メバロン酸経路が関与することを明らかにした。 (実験計画、実験、解析、論文作成を担当)
4. Cytotoxicity of 15-deoxy- Δ 12,14-prostaglandin J ₂ through PPAR γ -independent pathway and the involvement of the JNK and Akt pathway in renal cell carcinoma (査読付)	共	2012年	Int. J. Med. Sci., 9: 555-566 (2012)	<u>Fujita M</u> , Tohji C, Honda Y, Yamamoto Y, Nakamura T, Yagami T, Yamamori M, Okamura N 15-deoxy- Δ ^{12,14} -prostaglandin J ₂ がRCC細胞のアポトーシスを誘導して抗腫瘍効果を示すこと、その作用機序としてJNK MAPKやAkt経路が関与することを示すことを明らかにした。 (実験計画、実験、解析、論文作成を担当)
5. 15-Deoxy- Δ 12,14-prostaglandin J ₂ enhanced the anti-tumor activity of camptothecin against renal cell carcinoma independently of topoisomerase-II and	共	2011年	Biochem. Biophys. Res. Commun., 410: 563-567 (2011).	Yamamoto Y, <u>Fujita M</u> , Koma H, Yamamori M, Nakamura T, Okamura N, Yagami T 15-deoxy- Δ ^{12,14} -prostaglandin J ₂ がRCC細胞において、既存抗がん剤であるカンプトテシンとの併用効果を示すこと、ならびにその機序としてトポイソ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
PPAR γ pathways (査読付)				メラゼやPPAR γ が関与しないことを明らかにした。 (実験、解析、ならびに論文作成の一部を担当)
6. Proteomic identification of protein targets for 15-deoxy- Δ 12,14-prostaglandin J ₂ in neuronal plasma membrane (査読付)	共	2011年	PLoS One, 6: e17552 (2011)	Yamamoto Y, Takase K, Kishino J, <u>Fujita M</u> , Okamura N, Sakaeda T, Fujimoto M, Yagami T 15-deoxy- Δ ^{12,14} -prostaglandin J ₂ の細胞膜結合タンパクを明らかにした。 (サンプルの調製を担当)
7. Cytotoxicity of troglitazone through PPAR γ -independent pathway and p38 MAPK pathway in renal cell carcinoma (査読付)	共	2011年	Cancer Lett., 312: 219-227 (2011).	<u>Fujita M</u> , Yagami T, Fujio M, Tohji C, Takase K, Yamamoto Y, Sawada K, Yamamori M, Okamura N 腎臓がんに対してTroglitazoneが抗腫瘍効果を示し、その経路がPPAR γ に非依存的事であることや、p38 MAPK経路が関与することを明らかにした。 (実験計画、実験、解析、論文作成を担当)
8. TNFRSF1B A1466G genotype is predictive of clinical efficacy after treatment with a definitive 5-fluorouracil/cisplatin-based chemoradiotherapy in Japanese patients with esophageal squamous cell carcinoma (査読付)	共	2010年	J. Exp. Clin. Cancer Res., 29: 100-105 (2010)	Kuwahara A, Yamamori M, <u>Fujita M</u> , Okuno T, Tamura T, Kadoyama K, Okamura N, Nakamura T, Sakaeda T. TNFRSF1Bの遺伝子多型が、食道がん患者における抗がん剤の臨床効果を予測因子となりうることを明らかにした。 (多型の検出を実施)
9. Effects of propolis extract on sensitivity to chemotherapeutic agents in HeLa and its resistant sublines (査読付)	共	2007年	Phytother. Res., 21: 841-846 (2007)	Takara K, <u>Fujita M</u> , Matsubara M, Minegaki T, Kitada N, Ohnishi N, Yokoyama T. 子宮頸がん細胞における抗がん剤の効果に及ぼすプロポリスの影響を明らかにした。 (実験、解析を担当)
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. Ax1キナーゼは、がん転移抑制の新たなターゲットになるのか？	単	2010年	ファルマシアtopics, 日本薬学会 10月号	複数の論文をまとめ、以下のように紹介した。 受容体型チロシンキナーゼAx1キナーゼは、がん細胞の浸潤や遊走の増大、増殖の促進、細胞死の抑制、血管新生の促進など腫瘍形成に関する種々の反応を引き起こす。さらに臨床においても、乳がんなど多くのがん組織でAx1の過剰発現が認められており、Ax1が高レベルに発現している患者では無増悪生存期間や全生存期間が短いことも報告されている。したがって、近年、Ax1はがんの転移抑制ターゲットとして注目されている。 Hollandらは初めて、経口投与の可能なAx1キナーゼ阻害剤R428を作製し、 <i>in vivo</i> において乳がんの転移を抑制し、生存期間を延長することが示された。さらに、低用量のシスプラチンと併用した場合、各薬剤単独投与時と比較して肺や肝臓への転移を抑制し、化学療法剤との併用も有効である可能性が示された。今後、他のがん種における検討が期待されると共に、臨床への応用が待たれる。
6. 研究費の取得状況				
学会及び社会における活動等				
年月日	事項			